

---

# 病原体

勝目博

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

病原体

### 【Nコード】

N5872F

### 【作者名】

勝目博

### 【あらすじ】

突如現れた謎の病原体。病原体の撲滅に力を注いだのは、一人の日本人と、その友人達だった。

## 序章（１）

それは突如として人間を襲い始めた。地球の怒りが爆発した瞬間だった。

石油の採掘を繰り返す中東から、その脅威は瞬く間に全世界へと広がったのだ。

未知なる病原体。

今までのどんな病原体とも構造が違い、これまでの知識を持ってしても死滅させることは

出来なかった。

地球の方が頭が良かった。と言うことだろうか。

拡散だけはどうか食い止めることには成功したが、その病原体に侵されると、

致死率９７％にも上るのだ。

残りの３％の理由を、各国の医師や科学者が研究を重ねたが、

どうしても分からない成分が有り、死滅させることは出来ないでいたのだ。

学者の中には宇宙からの物質だと叫ぶものもいたが、

発生状況は明らかに地球内部からの発生としか思えなかった。

それは今から10年前の事だった……。

「ここはどうだ？」

ステイブの声は砂漠の砂嵐さえ消すほどの大声だった。

「ああ。ここならばいけそうだ」

尋ねられた男は、鼻まで覆ったバンダナをずらし、ステイブに叫んだ。

中東サウジアラビアで新たな油田探索が行われ、

アメリカの石油協会の依頼でステイブ、テラーはここに訪れていた。

部下は全部で6人。後の人員は現地調達だが、大きなバックアップのため、

金銭的問題は何も無かった。

ステイブ、テラーはその道のプロフェッショナル。大地のみならず海底油田探査でも、

その力をゆうに發揮し、石油協会からの信頼も厚かった。

いつものように仕事をこなすだけだと、ステイブ以下私を含めた全員がそう、思っていた。

私は唯一の東洋人として、かなり異質な存在に思われていたが、5年10年と経つうちに、

仲間からの信頼も勝ち得ていた。私の見た目は白人社会では、

当たり前のように小さく見えた。

勉強で視力も落ちたが、どうにか眼鏡のがり勉強だけは免れていた。

ようは、至って普通の東洋人だが、彼だけは私の鍛え抜かれた身体を見て知っていた。

そう、私は幼い時から武術だけは得意だったのだ。それでも、勉強が好きな普通の男だった。

何故、東洋人、日本人の私がこのチームと一緒になのか。それは私の留学がきっかけだった。

科学を学ぼうとアメリカに留学したときに出会ったのが、このステイブ、テラーだった。

学生寮のルームメイトとして彼と出会ったのだ。

大きな身体のステイブはフットボール選手。

奨学金で大学に進んだ男だったが、スポーツマンらしからぬほど頭脳も明晰だった。

私は物理化学およびそれに付随した生物物理化学を専攻していた。

彼は物理化学と地質学の専攻だった。

なぜならば彼の父がさく井の会社を持っていたためだ。

ようは井戸掘りだが、彼はそこで終わる事など、考えてもいなかった

「もっと大きな事をするんだ」と、いつも口にしていた。

アメリカ人から見ると、日本人は勤勉だと思われるようで、

何かにつけては色々な質問を浴びせてきた。

もちろん勉学が主だが、そのせいも有ってか彼とは急激に仲が良くなっていた。

彼は彼で日本人を連れて歩くことにも、優越感を感じていたようだ。

何故、そう思ったのかは分からないが、珍しいだけだったのかも知れない。

武術のせいかも知れない。或いは名前のせいかも知れない。

全米でも有名なベースボールプレイヤーと同じ名前だったからだ。

やがて彼の目は、地球物理学や海洋物理学にまで映し出され始めた。

今思えば、この時期から彼の目には地球の存在が大きく写っていたに違いないだろう。

結局私は1年の留学時期を最大まで延ばし、スティーブとともに卒業を迎えた。

卒業パーティーの最中に、彼は私に言った。

「なあ、イチロー。俺と一緒に働かないか？」

それまで就職のことなど、口にもしないスティーブの言葉に、私は驚きと戸惑いを感じた。

私には日本企業での就職が決まっていたからだ。

スティーブは親の仕事を引き継ぐものだと思っていたのだが、

話の内容ではどうやら自分で始めるらしい。

私は返事に困った。就職は決まってはいるものの、科学とは縁の無い仕事。

心は揺らいたが、決まった就職を今更蹴ることも気が引け、答えあぐねていた。

「直ぐに返事は出来ない。決まった就職先にも悪いし……」

どうにか答えた言葉は説得力に欠けているのは、自分でも理解していた。

ステイプは諦めの悪い男なのだ。

その性格が有るからこそフットボールでも勉学でも優秀な成績を残すことが出来たのだから、

十分な長所としてみていいだろう。

「いや。お前の就職先は間違ってる。前にも言っただろう。

お前の頭脳を眠らせる事になるぞ」

彼の言葉は私の心に致命傷を与えたようだ。言い換えれば就職意欲を殺した。

といっても良いだろう。

彼の言葉で私の気持ちのわだかまりが一気に消えた気がした。

『そう。僕をしたい事は、こんなことじゃない』

そんな気持ちをはっきりと自分の中で芽生えたのだ。

日本企業に就職を決めたのは、そのうち祖国に帰る為であって、

それ以上の理由もそれ以下の理由も無かったのだ。

「じゃあ、聞かがステイプ。君は一体何をやるつもりだい？

井戸掘りだったら僕は降りるよ」

彼は大きく意気を吸って、ニカツと笑い自慢げに答えた。

「石油を掘る！」

「え？なんだって！そんな簡単にいくもんか！」

私は驚きの声を上げたものだ。周りの卒業生たちもダンスや会話を中断して、

私に怪訝な表情を向けた。

「もちろん修行はするさ。でもな、親父の会社はたたむんだ。親父は引退だとさ。」

これが足がかりなんだ」

確かにさく井は、油田開発にも必要な知識と道具もある。ただし規模が違い過ぎる。

「いくらなんでも……」

私が声を殺して答えると、彼は私の首に手を回し小声で話し始めた。

「実はもう決めてあるんだ。アメリカでは有名な開発会社さ。」

もちろん君のことと言ってある」

「おいおい、まだやるとは言っていないぞ」

「いや、イチローはやるね、俺と一緒に！」

そう言っただけは大声で笑い出した。

「なんなら、賭けてもいいぜ。50ドル!どうだ!」

「よし!乗った」

かくしてその50ドルは、2日後には彼のポケットに消えていった。

## 序章（2）

最初の仕事は丁稚奉公と同じだった。寢床と食事は用意されるが、賃金は小遣い程だった。

それで、朝から晩までばつちりと働かせられた。

ステイプ曰く『この方が現場の最前線を経験できる』だった。

確かに目の前で偉業が達成していく様を、まじまじと見ることが出来た。

しかもここは海の上。さしたる娯楽も無いため、

私とステイプはいつも仕事の最前線に居るか、最前線で見ているかだった。

そう考えれば特等席には間違いが無かった。

5年も経った頃には、私もステイプも一人前の技師と認められていた。

技術もさることながら、大学での勉強、ここでの勉強の成果もあり徐々に頭角を現し始めたのだ。そして、待ちに待った独立の日が来たのだ。

資金は少ないとは言え、父親の会社を処分した金があり、

二人で貯めた貯金はかなりの額になっていた。

設立当初は、貰い仕事が多かったが、国内での活躍はやがて石油協会の耳にも

届くようになっていた。

部下も増え、海外にも進出し始めたのは更に5年の月日が流れていたが、

二人は充実した日々を送っていた。

仕事が楽しくて仕方が無かったのだ。

中には私たち二人を、同性愛者だと呼ぶものもいたが、無視することにしていた。

陸に上がれば女も買出し、バーに行けばナンパもする。ごく普通の

男だったからだ。

やがてそんな声はどこへとも無しに消え去っていった。

それから更に5年が過ぎようとした頃に、地球温暖化による原油削減が叫ばれ始めた。

しかしアメリカは途中で温暖化防止条約を破棄し独自の路線を打ち出した。

その結果多くの場所で採掘権を確保し、油田開発が頻繁に行われた。その余波は私たちの所にも及んできた。

そうして近年稀にみる大規模な油田採掘が行われ、

我々の会社も十分な結果を残すこととなった。

私たちの会社は一躍その道では有名企業に知られたのだ。

その後も順調に仕事をこなしていたが、今回訪れたサウジアラビアでその事件が起きた。

それが世界を危機に陥れるとは、私自身想像すらしなかった。

原油貯蔵層には、同時に多くの天然ガスが発生していることがある。その中に未知の病原体がいるとは、誰も予想さえしなかった。

調べても分からなかっただろう。

私個人の考えでは、地球の怒りしか考えられない。今まで何故一度も発見されなかったのか？

同じサウジの油田でさえ見つからない病原体だ。しかもその病原体は完全すぎたのだ。

そのうえ何故私とスティーブは最前線にいながら発病しなかったのか？疑問さえ浮かぶ。

まるで「お前たちがどうにかしろ」と言われているような錯覚さえ覚えた。

ガスが噴出しその場にいた作業員の大半は、翌日に発病。2週間足らずでその命を奪われた。

部下の6人のうち4人も5日後に発病。4人とも帰らぬ人となった。その悲劇はあつという間に中東全域に広がり、100万人が1ヶ月で命を失った。

我々残された人間はアメリカに戻ったが、入国に際しては最高基準の医療検査を受ける羽目になった。

私は日本の両親に連絡を入れたが、日本では話だけで病原体は発見されていないようだった。

私もスティーブも中東だけで終わるものと、少しは胸の心配を撫で下ろしたが、

その考えは甘かった。

突如としてヨーロッパで発見され、あれよあれよという間に欧州全体に広がりを見せた。

空気感染なのかそれさえもつかめない病原体。世界各国の機関がサウジでの調査に訪れた。

その間私とスティーブの身体には、何の変化も起きなかった。

ころが残る2人の部下も、発生してから3ヶ月目にアメリカ国内で発病した。

何故、このような時間差が現れるのかさえも理解できないようだ、医者は空しく首を振るだけだった。

発病すると高熱により意識障害を起こし、筋肉が急激に萎縮する。身体がだんご虫の様に丸まってしまふのだ。

やがて身体の穴という穴から出血を始める。これはエボラ菌に似ているが、

まったくの別物らしい。

言い換えれば、丸めた濡れタオルを力いっぱい絞るような感じだ。

幸い意識障害を起こすため、極端な痛みはなさそうだが、

致死率97%では発症したと同時に、隔離するしか処置が無かった。全米でもあつという間に広がった。しかしここで私はあることに気がついた。

アジア近辺。また在米アジア人の発症率が極端に低いのだ。

まだ、アジアでは発症の報告さえない国も有った。たとえ発症しても、

在日のアメリカ人が白人だけなのだ。

「どう思う？」

私はその事実をステイプに尋ねてみた。

「うん。俺も気になっていた。完全に白人がターゲットにさえ思える」

「ただし、白人でないアラブ人も被害に有ってる。なぜ、アジアだけが発症しない？」

その考えは既に各国の学者の間で取り交わされていたが、答えが出ない以上発表は避けられていた。

仮に「アジアは安全です」などと発表しようものなら、みんなこぞってアジアに押し寄せるだろう。いわゆるパニック状態に陥ってしまうのだ。

そこで各国は国際線の離発着を大幅に制限しだした。これは中国が初めに打ち出したのだ。

「国際線の乗り入れを全面的に禁止する」というものだった。

各国はそれならばと「輸出入の全面禁止」を打ち出し、国交断絶状態に陥った。

唯一日本は国外との国交を保っていたが、その数は極端に減っていた。

その間も謎の病原体は勢力を広げ、ロシアにも広がり始めた。温度には無関係らしい。

中東の砂漠で発症した病原体は極寒の地でも活動できることを世界に知らしめた。

アジアがダメならと、ロシアにと渡った裕福な階級の白人が最初の餌食となった。

やがてロシア人の身体をも侵食し始めたが、アジアではいまだに発症例は少なかった。

各国首脳は日本への要人受け入れを打診したが、日本は断るしか出来なかった。

これは『アセアン』で決まったことであり、独自の返答はアジア諸国とも国交断絶を

意味していたからだ。

日本の問題は食料問題に密接だったからだ。今ではタイやカンボジアなどから

食料を調達できているが、『アセアン』の意向に背き要人を受け入れることは、

食糧確保の点から言っても出来なかったのだ。

ところが同じ『アセアン』所属のオーストラリアでもついに病気の発症が確認された。

白人色が強いこの国では致し方ないだろう。

オーストラリアは自ら『アセアン』を脱会していった。

これでアジアの牛肉輸入はほぼ無くなったといっても良いだろう。

この病原体の特徴は人間以外には無害だということ。

なぜかアジア人には今のところ発症しないこと。

温度、地域は関係ない。感染方法が分からない。などの特徴が挙げられる。

いや、それしか分かっていないのだ……。

## 1章（1）

私とスティーブは自ら進んで病気の研究施設に足を運んだ。

研究者たちは両手を広げ歓迎してくれたのは言うまでもない。

サンノゼ国際空港から程近い場所の研究施設はあった。

二人の居るところからは、1時間くらいでいける距離だ。

サンフランシスコからもその程度だろう。

私たちは到着すると直ぐに色々な検査に駆り出された。

病原体の発生場所にいながら発病しない白人と、同じく発生場所にいたアジア人だ。

研究者たちには格好の研究材料だろう。実のところ、今まで二人は逃げ隠れていたのだ。

政府が放って置くわけはないと、再三の呼び出しを無視していたのだ。

やがて、誰かが迎えに来るのは明らかだった。そこでサンタ・バーバラの自宅を引き払い、

モントレーの山中に身を隠していたのだ。もちろん別荘だが、

誰にも知られて居ない隠れ家だった。

私たちは様々な検査と受けさせられた。それは苦痛の何者でもなかった。

血を抜かれ皮膚をとられ、内臓の一部も外科手術によって切り散られた。

しかし全ては人類のためだと、我慢するより仕方なかった。

ところがこうして調べることによって面白い事実が明るみに出た。

我々二人は既に感染していたのだ。

切り取られた内臓の一部から、その病原体が発見されたので有るが、何故、感染しているにも関わらずに発病しないのかが、それが焦点となっていた。

アジアでは食糧難が起きはじめ、高額になった食料を求め暴動さえ起きていた。

貧困の激しい国では餓死者が後を絶たなかった。

方や病気で、方や飢餓で死者の数はうなぎのぼりで上がっていった。

国際ニュースだけはそれでも見ることが出来たが、

日本国内での暴動だけは目を背けずにはいらなかった。

私はそんな各国のニュースを見ながら、あることに気がついた。

それを研究者たちに話したのだ。

「言われたことを調べたがこれが？」

研究者の一人が私の要請を聞いて調べたデータを持ってきてくれた。

研究の役に立っているのだ、嫌とは言えないだろう。

私はデータを受け取って、自分なりの考え通りにまとめてみた。

その結果、またも面白いことに気がついた。

「これ見ろよ」

私はスティーブに私なりのデータを手渡した。

「これが何か？」

スティーブにはピンとこないらしい。私が渡したのは被害者のデータだ。

全ての国のがインプットされているから、まずはアジアを抜かしたデータ。

実際にアジアでは発症していないため、病気の死亡としては抜かさなくてはいけないのだ。

次に男女別データ。男と女の発症率、及び死亡率が分かるデータだ。

男女の死亡者数ではそんなに開きは無い。そして、年代別。

10代から70代までを分けてある。

ここで、面白いのが男女の死亡者数だ。

男の死亡者数はどの年代を取っても同じような比率に対して、

女の年代別には大きな差があったのだ。

10代後半から40代半ばまでは女性の死亡者数は極端の少ないのだ。

その代わり他の年代では男よりも数倍も多い。

「どういう事だと思う?。」

「うーん、確かに不自然だな……。」

「な、そう思うだろう。ただ、この年代が他と比べて、何が違うか……なんだよ。」

「そんなの、簡単じゃないか!。」

ステイプは目を大きく開き叫んだ。

「え?なんだよ!。」

「食える年代だよ!。」

ステイプは大きな声で笑いながら答えた。

「なんだって？」

「言い換えようか、子供が作れる年代さ！」

「生理か！」

そう考えれば、生理のある年代の女性の死亡者数は極少数だ。

「じゃあ、何のために？」

「そこは……わからない」

そう答えてから、私は付け加えた。

「地球が、人間をふるいにかけている」

ステイプは私の答えにまたも大きな声で笑い出した。

「じゃ、俺たちは、地球から認められたのか？ いまでも、生きてるのがその証拠か？」

感染しながら発病しないことに、ステイプは焦りと恐怖を感じていた。

それは時間差で発症する事もあるからだ。それが二人を研究施設に向かわせた理由でもある。

命あるうちに……と。

地球が神ならばね……。と答えようとしたが、声にはならなかった。  
スティーブは敬謙なクリスチャンだからだ。

彼の宗教では、キリストの存在が神。神の申し子なのだ。地球ではない。

しかしこの仮説を、研究者は大いに喜んだ。盲点だったらしい。

## 1章(2)

それから言うものは、その年代の女性が多く研究対象にされた。その研究で分かったことは、全ての女性が感染していた事。

もはや病原体からは逃げられなかった。

しかし病原体は発見されたものの、繁殖さえ行わずに安定していた。じつと体内で大人しくしているのだ。

ところが、生理が上がるや否や活動を開始するのだ。そのときを待っていたかのように。

若い年代で発病し死亡した多くの女性は、ピルの常用者だった。

日常的にピルをのみ、生理を無くしていたからに違いない。

ただし、ピルと言うのは身体が妊娠している状態にさせるものだが、実際の妊婦には発病者は居なかった。

誤魔化しは効かないと言う事だろうか。

女性ホルモンの関係だと研究者は躍起になったが、これも的外れだった。

どんなホルモンを与えても、シャーレの中の病原体は活発に働き、ホルモン自体を破壊したのだ。

しかもそれが理由だとしたら、アジア人が発病しない理由付けにはならなかった。

そんな時とうとう、中国でも発症は起きたのだ。当初中国はそのことをひた隠しにしていた。

隠蔽していたのである。そして何食わぬ顔で、国交を回復すると言いつ出したのだ。

これには各国ともに疑惑の目を向けた。そして明らかになったのが、急激な国内での死亡者だった。

何故急に発生したのか、中国は謝罪すらせずに各国に救済を求めた。渋々ながら研究者たちは中国を訪れた。

そして、直ぐにアジア各地でも病原体に因る死者が急増し始めた。

もはや、世界のどこにも逃げ場はなかった。

このとき既に、地球の人口の半分は死滅していた。サウジの事件から3年しか経っていない。

各国の研究者たちも次々と病に倒れたいった。

もう、研究どころの話ではなくなっていたのだ。

食料も、燃料も全てが底をつき始めていた。生きるだけで精一杯の状態だ。

私とステイプも研究施設を追い出された。閉鎖を余儀なくされたのだ。

兎に角、私は日本に帰りたかった。

そして発生から5年目のある日、そのチャンスが巡って来た。

「君はどうする？」

私はステイプに聞いた。

「私の家族はもう居ない。友人も多くを失った。今は君だけだ……」  
「分かった、一緒に行こう」

世界が平和な時には、12時間も我慢すれば、日本の地に降り立つことが出来たが、

今回はそうは行かなかった。海洋資源の調達……。簡単に言えば漁船に乗り込んだのだ。

ただし漁船といってもマグロのような大型な魚のための漁船。

太平洋を渡るのには、何も問題の無い大きさだ。

どこの国でもそうだが食糧難に苦労している。

各国はこぞって食料の宝庫、海へと向かったのだ。

その点アメリカは食料では他の国を尻目に、自給自足できていた。

燃料もわずかではあるが国内の油田で確保できていた。値段はべらぼうに高いが……。

小麦が国民の腹をかううじて満足させ、贅沢品の車はその量を減らしていた。

燃料のほとんどは、漁業や農業の機械に回されていたが、一部の人間はいまだに車を持ち回していた。

一時は放置されていた畑も今ではとうもろこしなど、盛んに作られ始めたうえに、

人口の減少によってアメリカは食糧難をほぼ、克服したと言っても良かった。

船はロングビーチの沖合いに停泊していた。サンノゼからは10時間近い車の移動になる。

燃料は研究施設から、礼としてもらっていたのだ。

ロスの家は処分したため、ここからの出発は仕方のないことだ。

しかし、どうにか小麦で耐え忍んできたが、供給が安定すると今度は、贅沢な品に走る。

人間の悪いところは一向に治ってはいないが、

お陰で日本への切符が手に入ったのだから文句は言えない。

しかしお客扱いではない。船員と同じに職務をこなさなくてはならないのだ。

検査に因る隔離生活で、私たち二人の身体は、昔のような元気な身体ではなくなっていたが、

その身体に鞭打ちながらも船員の真似事を続けていた。

その頃日本でも、人口減少により食糧難は回避されたが、治安は悪化の一途を辿っていた。

ここ、沼津も例外ではなかった。

長い期間アメリカに渡ったきりの息子とは、連絡さえ付かない。

漁港と言っただけ有って暴徒の襲撃は日常茶飯事だった。

木製の船舶などは、いち早く燃料に変わっていたが、

残り少ない燃料でも漁は行われていたのだ。

「イチローはどうしたものか……」

年老いた男は横に座りお経を唱える女性に独り言のように呟いた。

「……そうですね。妹の死も知らないなんて」

お経の言葉を止め女性は答えた。

ただし、その皺の深い目は正面の写真から離れることは無かった。

## 1章(3)

ステイブと私は、船員の真似事のお陰で、徐々に体力を戻しつつあった。

元フットボールプレイヤーと、格闘家だ。ちょっとしたことでは根も挙げない。

やがて他の船員も驚くほどの仕事をこなし始めた。

日本行きと言ってもまっすぐに向かうわけではない。

多くの漁場で水揚げをしながらの航海だ。

途中ハワイで何度か給油しながら近場の漁場を何度か回った。

アメリカは州軍により統治されていた。燃料や食料の配給も州軍によるものだ。

食糧確保の漁船などは優先的に燃料の配給を受けることが出来て、当初の心配は無かった。

それでも都市部の商店などはすっかり暴徒にあらされ、何も残ってはいなかった。

そして暴徒が次に狙いをつけたのが、農村や漁港だった。

流石の大統領も国防軍だけでは手に負えず、州軍の出動となったのだ。

この時点で大統領は3人を失っていた。前任者が次々と病に倒れたから仕方が無いのだが、

現在の大統領は軍事主義者としては有名な男だった。

州軍出動は彼らしい考えだったが、農村と漁港の防衛はしっかりと遂行され、

人々の生活は安定を見せたのだ。

漁船などは休むまもなく操業に駆り出された。それはここハワイでも例外ではなかった。

「いつになったら着くんか」

とうとうステイブが疑問を声に出した。

「うん……。そうだよな。もう、4ヶ月か……」

私もずっと気になっていたのだが、誘った私から弱音にも似た言葉を吐くわけにはいかない。

そう思い我慢していたのだ。当初船長の話では、魚場を回りながらだから、

2ヶ月以上はかかるぞ。

とは言われていたが、既に倍の日々が過ぎていた。その晩堪えきれずに二人で、

船長の船室を訪れた。

「その件か……。まあ、これを見てくれ」

船長から渡されたのは、横須賀の基地から送られた文書だった。そこには……。

> 船長には悪いが今の日本は治安が悪い。我々も食料には難儀しているが、そんなことはお構い無しに、日本人が近くの海域を荒らしている。近づく船舶を停止させ、略奪行為を行っているのだ。我々としても、その船舶数が多いため、全ての船舶の護衛も出来ない状態だ。しかし日本の燃料も底をつくだろう。そうなれば邪魔されること無く入港できるはずだ。それまで待機してほしい<

正直言つて私にはショックが大きかった。

そこまで緊迫した状態だとは思っても見なかったのだ。

日本の軍隊は自衛隊だけだ。国民に大して軍行動をとることは出来ない。

アメリカのように銃社会にも慣れていない。略奪者の射殺など出来ない芸当だろう。

無法地帯と化しても仕方の無いことだった。

しかも、両親や妹の安否は掴めないままだ。私の呆然とする態度を見て、船長は口を開いた。

「大丈夫だ。きっと日本に行ける時が来る。それまで頑張ってくれ。」

君たちの能力は高く買ってるよ」

私は黙って頷くしか出来なかった。ステイプは私を抱え船室へと連れ帰った。

「どうする、このまま待つか？それとも、次にハワイに入港したときに別の手を捜すか？」

「このままじゃ、いつになるかわからないしな……」

だからと言って、ハワイに降り立っても日本に向かう手立てが有るわけではなかったが、

この時間が無駄に思えて仕方なかったのだ。ハワイの人口もかなり減っていたが、

それなりの生活はしていた。

それでもほとんど国交のなくなった国への渡航は、困難極まった。

どうにか漁船に乗り込み、グアムまでは近づくことが出来たが、

その先は一向に進展しなかった。

そんな時ニュースで流れたのが、病原体の変異だった。

それによってアジアでの拡散が始まったと、

中国を初めアジアの各地で調査していた専門家は言っていた。

やはり女性の生理とは、関係がなかったようだが、何故急激な変化をもたらしたのかは、

謎のままでった。

## 2章(1)

私はこのニュース見て、人種の違いに着目していた。発症地域の差は、

人種の違いに思えたからだ。

では、『そもそも人種とは』そして『いつ、差が生まれたのか』という事を考えていた。

「なあ、あの地層は、何年くらい前だろう」

ステイブは一瞬怪訝な表情で私を見た。

「あの地層？油田のか？」

もちろんサウジアラビアの問題の油田のことだ。

「ああ、いつごろの地層だろう？」

私は更に尋ねてみた。

「はつきりとは解らないが、あそこでは300メートルは掘ってる。あの地域で言ったら……。石器時代か或いはもっと前か……」

さすがに地質学も勉強したステイブだ、大体のことは直ぐに答えが返ってくる。

「もし、もしもだよ。古代人に関係があったらどうだろう？」

「ん？関係とは？」

「いや、よく考えると、アジアに住む人種と、白人は元が違うだろう？言い換えれば、

北京原人と……」

「ネアンデルタール……か」

彼は私の言葉の先を読んだ。よくやることだが、このときは流石に早い反応を見せた。

すると、私に制止の合図を送って自分の荷物から2冊の本を取り出した。地質と人類の本だ。

敬謙なクリスチャンのステイブは創世記のアダムとイブも信じているが、

進化論も否定はしていない。

人類の祖先は原人だとしても、人間としての最初の人物はアダムとイブだと、

彼は熱弁を振るっていたことがある。

言い換えれば、初めて二足歩行をしたのがアダムとイブなのかも知れないと。

そして問題のネアンデルタール人だが……。

書物の結果、ネアンデルタール人は3万年近く前に絶滅していることが明らかになった。

それは人類の祖と言われるホモ・サピエンスとの類似点は多いとしても、

別に枝分かれした種族だったからだ。

ということは、今の人類とネアンデルタール人は繋がりが無いことになる。

しかし、書物にはこうも書かれている。

『ネアンデルタール人の絶滅の原因はよくわかっていないが、クロマニヨン人との衝突により絶滅したとする説と、獲物を取り合いより徐々に絶滅へ追いやられたとする説、

ホモ・サピエンスと混血し急速にホモ・サピエンスに吸収されてしまったとする説、

など諸説ある』

ということは、クロマニヨン人、ホモ・サピエンスと同時期に、同じ場所に居たことになる。

分子生物学が長足の進歩を遂げ、分子系統学が台頭してきた1970～80年代頃には

現生人類は、アフリカに起源を持ってそこから世界に拡散したものである。

『単一起源説』が主流となっている。

ネアンデルタール人類は55万年から69万年前にホモ・サピエンスの祖先から分岐した別種で、

現生人類とのつながりは無いという結果がもたらされた。

しかし、ここで注目したいのは、ホモ・サピエンスに吸収されてしまった絶滅説だ。

吸収されたのならば、その特徴を引き継いでも、驚くことではない。それが各地域で同時に起こったかどうか？

北京原人も、アフリカから拡散した種族に、吸収されたとしたら？ 単一起源説でも、同人種とは違ってくるのではないだろうか。

事実、現代人の私たちは、あまりに違いが多すぎるのだ。

そうになると、私とステイプの人種的違いは見えてくるが、

同じような状況で発症しない理由が、言い換えれば、何か同じものを持つている必要があるのだ。同じ条件下でも発症しないなにかの共通理由が……。

分布だけを見てもその範囲は広い。

イラク北部からフランス、イギリスにまで分布しているのである。

現在、アフリカの状況は報道されてはいないが、アジア同然に発症の時間差があれば、

この時代からの贈り物と考えてもよさそうに思えた。

贈り物とはいささか不謹慎かも知れない。人類の半分が死滅しているのだから。

しかし、地球が自らに巢食う病原体、これを人間だと仮定して言えば、

巢食う病原体を退治するため、自ら防衛組織を、人間で言えば白血球に当るだろうが、

これを噴出したと考えるのも、否定できないように感じたのだ。

しかし今の私たちには、この仮説を立証できる設備も仲間も居ない。日本に帰ることが出来れば、その筋の友人も居るし研究施設も残っているだろう。

友人の安否は不明だが、必ず誰かしら取り組んでいるだろうと考えられた。

このまま人類が滅亡するとは、どうしても納得はいかなかった。

実際に我々二人は感染しているにも関わらず、体力も元に戻り元気でいるのだから……。

## 2章(2)

ステイプと蠟燭の明かりの中、鼻をつき合わせて本を見ていると、

行き成り部屋のドアが叩かれた。

「居ますか？」

声だけでは分からない。聞いたこともないような声だ。私は身構えたが、

ステイプは平然とドアに向かった。彼らしからぬ無用心さに、私は小声で叫んだ。

「ステイプ。開けるな！」

「ん？何故だい？カウボーイさ」

『カウボーイ？』そう言われて私はエントランスで会った男を思い出した。

テキサス生まれの『カウボーイ』。もちろん名前ではない。俗称としてみんなから呼ばれている名だ。

ステイプには彼の南部訛りの言葉が分かったのだろう。

「あんたたちにお客だよ」

ドアを開けると、ベルボーイの制服を誇らしげに着て、不精髭の伸びたカウボーイがニコニコとして立っていた。

ステイプはポケットからタバコを一本取出しと、カウボーイに手渡した。

カウボーイは満面の笑みを浮かべてお辞儀をすると、踊るようにその場を立ち去った。

流石はステイプだ。チップの国とは言え、

こんな状態でも自然とそんな行動をとれることに少々驚いた。

カウボーイは元々このホテルで働いていた。今ではホテルも営業していないが、

行くあてを失った多くの人が寝泊りしていたのだ。

カウボーイは、ベルボーイになりたかったが、訛りが抜けずに厨房の補助として働いていたらしい。

そんな理由から、今ではホテル内での案内や伝言を受け持っていたのだ。

彼はやっと憧れの仕事につけた喜びに浸っていた。既に電気などは止まっている。

蝋燭が唯一の明かりだ。

蝋燭の炎が消えないように手で囲い、1階のエントランスへを向かった。

そこには初めてみる日系人らしい男が立っていた。

男は私の耳元に近づき、軽く周囲を見回し小さく言葉を発した。

「日本へ行きたいのか？」

言葉は英語だが、どこか不自然に感じられた。

「ああ、行きたいが、あてが有るのか？」

我々は日ごろから人の集まるところで、張り紙や会話でその旨を伝えまわっていた。

グアムなら、日本までの距離はさほどでもない。

こんな時勢だから何か手が有るのではと、触れ回っていたのだ。入管すら機能していないからだ。

中には敵意に満ちた目を向けられたこともあるが、

そこはステイブの睨みが抜群の効力を発揮していた。

私は自分が日本人だと言うことを隠さなかったからだ。

それでもグリーンカードと言う永住権は取得していた為、

食糧配給はどこに行ってもあぶれる事はなかった。

「ああ、有る。ただし条件付だがな」

「聞かせてもらえるか？」

ステイブは初めてみる男を無言で睨み付けていた。私もはじめて会った時は、

彼に睨み付けられたのだ。いかにもアメリカ人らしい対応だと、今なら納得できた。

ただ当時は、睨まれる理由の見当が付かず軽い恐怖さえ感じたものだ。

隣人をも信用できない国。

銃社会がその性格を作り上げたのだろう。

大抵のアメリカ人は最初から人を信用などしないのだ。

誰かの紹介ならともかく、学生とは言えその精神は他の大人と同じだった。

その代わり、信じるとトコトン信じるのも、いかにもアメリカ人らしかった。

3階の部屋に案内するなり、その男は突如、日本語で話し始めた。

「私も連れて行ってほしい。地元の人間のふりをしているが、単なる旅行者なんだ。でも、

それがばれると食料さえ……」

男の言いたいことは分かっていた。配給対象から外されることを恐れていたのだ。

男はそれでもどうにか通じる英語のお陰で今まで生き延びて来れたらしい。

名を山口と名乗ったが、本名かどうかは分からないし、こんな状況下では問題でもなかった。

「で、そのあて、とは？」

ステイプには日本語は分からない。冗談で色々な言葉を教えたこともあったが、

あくまでもお遊びの域を抜けてはいなかった。

同時通訳も面倒などで、有る程度話を聞いてから彼には説明することにした。

山口の話に因れば、グアムの近海で日本漁船との取引が行われているそう。

食料はどうにか普及してるが、ここグアムでは医療品の不足が深刻な問題らしい。

医療品の欠乏も、本土から遠く離れた地では当然ありえる事だと思

った。

遠くの親戚より近くの他人。である。

日本の医薬品の備蓄は世界でもハイレベルだ。

そこに着目した何者かが秘密裏に取引を行っているようだった。

山口はその段取りの会話をハーバーの片隅で聞いたそうだ。

寢床を求め彷徨った結果、ハーバーのボロボロの網の中で惰眠をむさぼっていたのだ。

会話はこの時、夜中に目覚めた山口の耳に聞こえてきたらしい。

山口の話では、どうやら軍服を着ていたらしいが、

月明かりで顔だけははっきりと見たようだ。

グアムにもかつて軍の基地があった。

今でこそ閉鎖されたが、軍人崩れの男たちはまだ多くこの地に残っていた。

州軍に編入も出来たが、多くは国防軍に誇りを持っていた。

本土に戻ったところで、何の楽しみもない上、家族を失っている者も多く居たのだ。

だが、山口は流暢な英語が話す事もできないただの旅行者。しかも仲間も居ない。

その男たちとの交渉など出来るはずも無い。そこで目につけたのが私の存在だったのだ。

私は日本人で有りながら、隠すことなくそれを伝え歩き、渡航の手はずを探していた。

隣には常にステイプが行動を共にしている。

だからこそ山口にしてみれば、私に声をかけたのだろう。

彼は信用させるために、ボロボロになったパスポートを衣服の下から取り出して私に見せた。

確かに日本のパスポートで、名前も名乗ったとおりの男だった。入国管理の日付……。

まだ、国交が正常なときの日付に間違いはなかった。

するとこの山口は、何年もここで生活していたことになる。

それが私には納得がいかない唯一の事柄だったが、渡航の手はずをつけるためには、

山口の存在は必要だった。その会話が交わされた人間を知っているのは、山口だけだからだ。

用心しながらも表面的には喜んで彼を仲間に迎え入れた。

このことは、ステイプにも言っではいけない。

彼のことから、疑わしいと思ったらトコトン追求するだろう。

そうなれば渡航の手はずがつかなくなる恐れが有ったからだ。

差しさわりのない範囲で説明すると、ステイプは山口を抱きかかえて喜んだ。

しかしまだ渡航できるとは限らない。その相手を見つけ、交渉しなくてはならないのだ。

それでもステイプには先が見えた喜びで一杯だったようだ。

私も本心では喜び踊りたい気分だが、まだ先は長い。

子供のように喜ぶステイプを見て私は思った。

『今は、これで良いのだ。今は……』と。

## 2章(3)

それから我々は山口が会話を聞いたハーバーに、夜の時間帯だけ張り込むことにした。

3人では目立つ理由から、2人での行動をとるようにした。山口は外せない。

顔を知っているのは山口だけだ。

よって、山口と2人のどちらかだが、毎晩チームを組むことに成るが、

ステイブはあからさまに難色を示した。無理も無い事だ。

ここは日本ではない。どんな状況下でもアメリカ領土なのだ。

どうみても日系人の2人組が、何度もそんなところでうるついでいれば、

目立っても仕方が無いからだ。

できるだけ山口と私を組ませまいとステイブは、毎晩の張り込みに自分が名乗りを上げた。

しかし数日たっても、手がかりさえ掴めなかった。

時間も場所もはつきりしない所での張り込みは、疲れる以上に無謀にさえ思えた。

張り込みはステイブに替わって貰いながら、私は夜の街を徘徊した。

もちろん当てもなく彷徨うわけではない。

何度か歩き回った人の集まる場所に、積極的に足を運んだのだ。中には顔見知りもいる。

武道の心得があることさえ知っている者もいた。

何度か喧嘩になりステイブと私とで軽く相手をしてやっただけだが、

みんなの注目は私に集中した。

ステイブは見るからに強そうだが、2回りも小さい東洋人の動き

に驚いたようだ。

日本の武道は世界各地で盛んに行われたいたが、実際に見るのは初めてという人間が多いようだった。

それから私を見ても挨拶する人間が多くなったのだ。

その噂が広まるには大して時間はかからなかった。

お陰で一人で出歩いても、危険を感じることはなかった。

人相はあらかた山口から聞き出してある。

ここにも軍服を着た人間が多く居るのを、私は以前来た時に確認していたのだ。

「こんばんは」

不意に焚き火の囲む集団の中から、一人の黒人が足早に近づき声をかけてきた。

「こんばんは」

私は無表情で答えた。チャラチャラと派手な服に身を包んでいる。

「あんた、例の日本人だろ？」

男の言うことは分かっていた。どこかで噂を聞いたのだろう。しかし、私はしらを切った。

「何のことだ？」

「いいって、わかってるからさ。それより情報を買わないか？」

「情報？買う？金でもほしいのか、金など、今じゃ何の価値は無いぞ」

目だけを男に向けて私は答えた。私の言葉に男は一瞬身構えた。

「おいおい、睨むなよ。あんたにもとつても良い情報なんだが……」

私はそれまで歩き続けていたが、どうやらこの男は諦めそうも無い。立ち止まり男の目を見据えて尋ねた。

「私のほしい情報は分かっているはずだ。それに見合う情報か？」

「もちろん、あんた達が日本に行きたがっていることは、先刻承知だぜ」

「その見返りは？」

「あんたの腕さ」

そう言うとも男はニヤリと笑った。黒い顔に白い歯が光る。夜だとその白さが余計に目立った。

周りの焚き火を反射して、白目も光を発するように輝いていた。どうやら私の武術の腕を買っているようだが、まっとうな事のためとは思えなかった。

私は無言で歩き出した。

「おい、情報いらねえのか？」

「私を買いかぶり過ぎだ。情報は自分で集める」

そう言い残し私は立ち去ろうとしてた。

しかし男の発した一言は私の足を止めるには十分だった。

男の発した言葉は『医療品』

その言葉の持つ意味は、必死に張り込んでいるスティーブへの答えに聞こえた。

足を止めた私の側に、男が駆け寄った。

「聞いたんだろう。取引の話を……」

それはこの男と山口の繋がりを感じさせるものだった。

山口がコンタクトを取ったのも知っているのは確かだ。

ただ男は、同じ情報を持っているだけかも知れないが、それ以上の情報かも知れない。

或いは山口と仲間なのかも知れない……。

### 3章（1）

その頃ステープは山口と共にハーバーの棧橋に来ていた。

張り込み中、棧橋に来るのは何度もだが、それらしい男たちは見つからない。

山口が会話を聞いた場所を中心に、棧橋での偽装散歩が続けられていた。

山口が男たちの会話を聞いてから既に3ヶ月は過ぎていたが、彼らも馬鹿ではない。

そう何度も危ない橋は渡らないだろう。次の取引は来年かも知れないのだ。

ただ闇雲張り込んで無駄では？と、ステープには思えてきたのだ。

「なあ。山口。どんな軍服か覚えてるか？」

ステイブには彼なりの疑問と心当たりが有ったのだ。現役の軍人なのか、軍人崩れなのかが知りたかった。

栈橋の舳先に腰を下ろし、ステイブは山口に尋ねた。別に男たちの会話を盗み聞きする訳ではない。

姿を見られても構わないのだ。男たちの発見が最優先であり、見かけたら寢床まで跡を追うだけなのだ。

不自然に隠れるより堂々と『我関せず』を決め込む方が安全に思えた。

山口はステイブを見ながら首を振った。そして質問に質問で答えた。

「君たち二人はどんな関係だい？」

山口は言葉を搜しながらゆっくりと声を出した。とてもアメリカ人と交渉など出来る会話力はない。

ステイブもゆっくりと分かりやすく言葉を選んだ。まるで子供に話聞かせるようだ。

「イチローとは大学時代からの友人だ」

ステイブはそれだけをゆっくり時間をかけて答えた。

サウジアラビアでのことや仕事のことには一切触れなかった。これは事件のあと、イチローと決めたことだった。

『病原体はいつかは発見されるだろうが、我々が世に送り出したことには間違いない。』

恨みは買つことがあっても、感謝などされないだろう。ここは黙っておく方が身のためだと思う』

これがイチローの考えだった。山口とはたとえ話してもいつもこの程度の会話で終わってしまう。

そして栈橋を何気なく戻り、ハーバーの駐車場に集まる人たちとくだらない会話を楽しむのだ。

これがいつもの行動パターンだったが、ハーバーには昔のような活気はない。

ほとんどが栈橋の先から全てが見渡せたのだ。多彩なヨットも豪華なクルーザーも栈橋からは姿を消していた。

今では小型の漁船が数隻停泊してるだけだったからだ。

それに近海とは言え日本との秘密取引を行うには、それ相応の船が必要だろう。

今日もそれらしい船はハーバーにも沖合いにも停泊しては居なかった。

山口が立ち上がりいつもの行動を起こそうとするのを、スティープは止めた。

「まあ、座れよ」

山口は緊張気味の表情で隣に腰を下ろした。スティープに話しかけられるだけでも緊張するのだ。

「ところで、夜は一緒だが、昼は何をしているんだ？」

スティープの突然の質問に山口は一瞬身体を硬直させた。

「どう言う意味だ」

どうにか答えた山口の英語にスティープは戸惑った。

言葉の意味が通じないのか、どう言ってもりでそんなことを聞くのか、と両方の意味に取れたからだ。

日本人の英会話にはリアクションがないからだ。顔にしる身振りにしる表現に乏しいのだ。

「昼間は何をしている？」

ステイブはもう一度ゆっくりと尋ねた。

「ああ……」

しかし山口は黙り込んでしまった。この程度なら、何年もここに居たのなら通じるはずだと思ったが、

山口は答えを探しているように黙って俯いただけだった。

「何か、秘密が有るのか？」

更に追い討ちをかけるような質問を浴びせられ、山口はとうとう立ち上がった。

「イチローに話す」

そして一言残すと、スタスタと棧橋を戻り始めたのだ。

ステイプには会話力のない山口だから、私には説明できないのだらうと、

楽天的な考えしか浮かんでこなかった。そして山口を追うように歩き始めた時、

かすかなエンジン音が聞こえてきた。小型船舶の船外機のエンジン音のようだ。

音はゆっくりと棧橋に近づいていた。こんな夜中に漁など考えられない。おそらくゴムボートくらいだろう。

ステイプは身構え、その徐々に近づくエンジン音に耳を澄ませた。山口も数メートル先で身を伏せていた。



### 3章（2）

「ここだ。入ってくれ」

その頃、黒人がイチローを連れてきたのはとあるオフィス風のビルだった。

オフィスといっても大きな建物ではない。

ホテルからマリンドライブを西進した繁華街の一角だ。

この道を真っ直ぐに行けば、米海軍基地の有ったアブラ港へと続いている。

島の北部にはアンダーセン飛行場があり、港と飛行場の丁度中間あたりだった。

ここには元々チャロモ人が住んでいたが、今ではほとんどその姿を消していた。

どうやら、白人に集中的に襲い掛かった病原体を恐れていたことだろう。

現地人はわずかに残るだけだった。

厳密に言えば、ここグアムは州ではない。準州、自治区なのだ。

よってここで展開している州軍はハワイなどから派遣されているのだが、

その数は極端に少ない。言わば捨てられた島なのかも知れない。

本来ならば太平洋西岸の軍事重要拠点として、朝鮮や中国などに向けた最前線基地になる。

その結果一時は島の3分の1までもが米軍事関係施設になっていた。

もう一つ、観光人種は日本が群を抜いて多かったため、

民間の間では日本語も多く取り交わされていた。

山口が生きてこれたのもそのお陰だと聞いたことがあった。

しかし目の前の黒人は明らかに軍人崩れだろう。日本語など一言も口にしないからだ。

大抵の人間は挨拶する時に片言の日本語で声をかけたのに対し、

この黒人は終始英語だけで通したのだ。

入る時に見えた文字は『バンク』だった。『ハワイバンク』それがこの建物の名称だった。

もちろん営業などしてはいない。現時点では紙幣は紙くず同然だからだ。

ビル内部はしっかりと整理され、これから会うであろう人間の、

規律と指導力には些か興味を持った。

黒人の男も今ではチャラチャラした歩き方はしていない。

訓練された人間だとは一目で理解できる。

服装も言葉使いも全ては演技だったようだ。怪しまれずに私に近づくための……。

「ここです」

そう言つて男が促したのは、元は地下金庫室のような部屋だった。

嚴重な扉と抜け中に入ると、綺麗に整頓された軍事オフィスと、

糊の利いた軍服に身を固めた男たちが、狭い部屋を忙しそうに動き回っていた。

その奥の部屋へと案内され私に紹介されたのは、アブラ海軍基地の大佐だった。

いや、元大佐だったと言つたほうが良いだろう。

「わざわざすまない。こちらにも事情があり、大っぴらには行動できないので、

勘弁してもらいたい」

そう言つて右手を差し出した大佐は50半ばを越えたところだろうか。

引き締まった筋肉はいまだに健在の様子が、軍服を通して也十分に感じ取れた。

しかし何故、再編成されたはずの国防軍がこんなところに居るのが疑問だった。

大半の軍は本土に戻り本土の防衛に翻弄しているはずだった。

そんな私の疑問を見透かしたのか、大佐は続けて口を開いた。

「不思議に思うだろうね。しかし世界がこんな状態でも、

我々は監視を怠るわけにはいかんだ。

混乱に乗じて……などと言う不屈き者は居るのだからな。

現に歴史がそれを証明している。ただし、今までの歴史と違うのは、

これは大統領の意思ではない。ということだ。

かと言って派遣されているヘナチヨコの州軍でもない。我々は孤立した軍なのだ」

話しながら興奮しだす大佐に、私は恐怖と哀れみを感じた。

自分の言葉に酔い、正当性を語る口調はいかにも気の狂った人間に感じたからだ。

実際問題狂っているのだろう。再編の通達を無視し、ここに留まって居る事がその証拠だ。

だららこそ、ここでは話をあわせることにした。

怒られせたら何をしでかすか分からないからだ。

周りの部下たちも大佐の熱狂的な支持者なのだろう。

直立不動で立つてはいるが、言葉の節々では黙って頷いていた。

その後も大佐は何故に自分たちがここに居るのかを延々と話続けた。  
やがて

「珈琲でも飲むかね？本物だぞ」

と、私が黙って聞いていることに気分を良くしたのか、部下に持つてくるように命じた。

珈琲が運ばれた時、ようやく私は目の前の椅子に腰掛けるように言われた。

「気が付かずにすまん」

言葉とは裏腹な感情が見え隠れした。ようは信用できない男に見えたのだ。

一体この元大佐は、私に何をやらせようと言うのだろうか。

その話が出るまで、私はここで耐え忍ぶしかないようだ。

### 3章(3)

ステイブの居るところに遮蔽物はない。彼は諦めたかのように仰向けになり寝転んだ。

仮に見つかっても寝たふりをするつもりだった。

どう見てもアメリカ人のステイブは、疑われずに済む可能性もあったのだ。

下手に動くよりもましな行動に思えた。

こちらから見通しが良いと言うことは、相手からも見えている。

そう考えなくてはならない。

問題は山口だ。しかし山口の位置は、直ぐ後ろに栈橋の小屋があった。

ステイブは手で合図を送り、小屋に隠れるように促した。

山口もその合図を理解したように、ゆっくりと小屋へと後退していった。

エンジン音は直ぐそこまで近づいていた。

ステイブはポケットからウイスキーの瓶を取り出し、そして口に流し込んだ。

もちろん飲むためではない。酔っ払いの真似事の小道具だ。

口の中でウイスキーを転がす間、身体にも瓶からウイスキーを振りかけた。

元来飲まないステイブはそれだけで酔いそうな気分になった。

この張り込みを開始してから、常にボトルは持っていたのだ。

いざという時の為のカモフラージュ用としてだ。

山口はその間に小屋へと身を隠していた。どうやら間に合ったようだ。

ボートのエンジン音は徐々に回転数を落とし、丁度栈橋のへさきで止まった。

ステイブの直ぐ足元だ。おそらく上陸してくるであろう。

波の音が木製の栈橋の橋げたに打ち寄せる音と共に、何者かが上ってくる音が聞こえた。

ステイブはわざと寝言のような唸り声を上げた。

行き成りだと驚いた拍子に……。何てこともありえるからだ。

案の定、這い上がる音は一瞬止まったが、直ぐに動きが開始された。

目を瞑るステイブの直ぐ近くまで、何者かの足音が近づいた。

一人ではない。複数居るようだ。突然スティープは蹴飛ばされ目を開けた。

軍足だろうか重い衝撃がスティープの横腹にのめりこんだ。

「痛っ！誰だ！」

もちろん酔ったふりは忘れない。薄目を開けるスティープは強制的に立たされた。

「けっ！臭えな。この酔っ払いが……」

吐き捨てるような台詞がスティープを襲う。

「な、なんだと〜」

酔ったふりをしながら、彼らを見ると軍人だった。しかもかなり訓練されているらしい。

他の兵士はしっかりと散開し、周囲の状況に注意を払っていた。

暗視スコープを片目につけて、アサルトライフルの銃口がスティープに向けられていた。

その時、小屋の方で3発の銃声が鳴った。

「お前たちはなんだ〜」

銃声に驚き、つい声を荒げてしまったが、

見るからに分かりきっていることをステイブは吐き捨てた。

「うるさい奴め。黙らしてやろうか？」

そう言った兵士の、銃を握る手に力がこもった。

「オーケー。分かった。勝手にしてくれ、俺はもう少し寝かしてもらうぞ」

ステイブは両手で制止するような合図を送り、その場に座り込んだ。

兵士の銃はその動きに合わせるように、ステイブの頭部から狙いを外さなかった。

「おい、行くぞ。酔っ払いなど構うな。ここまで臭うぞ」

チームのリーダーだろうか、その男の言葉を聞くと狙いを定めていた兵士は、

ステイブに唾を吐きかけ立ち去った。10人は居ただろうか。みな重装備の兵士だった。

明らかに国防軍のようだ。それは民兵とは思えない統率と、真新しい装備が物語っていた。

しかしこんなところで何をしているのか……。

ステイブは薄目を開け、立ち去る兵士を睨みつけた。彼らが山口言っていた軍人か？

スティーブは兵士が居なくなるのを見計らって、千鳥足を装い小屋まで移動した。

さっきの銃声は誰に向けられものなのか……。山口が心配だった。

小屋に入り小さく声を出した。

「大丈夫です。ここに居ます」

それは山口のたどたどしい英語に間違いはなかった。

どうやら単なる威嚇射撃だったようだ。

しかし何故？訓練された兵士が闇に紛れ上陸する必要があるのか、しかもここは本土から離れているとは言え自国内だ。隠密の作戦でも腑に落ちなかった。

まるで国内で戦争でも始めるような殺気さえ感じたのだ。

#### 4章（1）

「それでは我々の目的と君の役割を説明しよう」

大佐はそう言つて自分の背もたれ付きの椅子に深く腰を下ろし、珈琲を一口飲んだ。

既に私の参加は決まっているような口ぶりだ。

とは言つても、断ることなど今の状況では無理な話だろう。

「日本と取引しているのは、我々だ。そこで君には、交渉の窓口に立つてもらいたい。

近頃の奴らは急に欲深くなりおつて、こつちが下手に出ているのを良い事に

『もつと寄せ』と言いはじめた。我々は医薬品がほしい。

見ての通りこれだけの軍を養えば、それなりの怪我人も病人も出る。

どうだ、引き受けて貰えないか？同じ日本人同士なら、話も通じやすいだろう」

「仮に私が話してもそのまま日本には行けませんね」

大佐は私の質問に眉を寄せた。

「無論、何度か話し合いをしてもらいたい。そして互いに納得できる条件が揃えば、

必ず君を日本に送り届けよう」

大佐はグアム全体の地図をデスクに広げ、私を手招いた。

「ここは元の海軍基地だが、ここに、我々の戦艦がある。

とは言っても廃船に近い駆逐艦だがね。それでもまだまだ戦えるぞ」

そう言つて大佐はアブラ港の一点を指差した。

いくら廃船の駆逐艦とはいえ、国防省が放つて置く筈はない。私はその疑問を投げかけた。

なぜならば、合衆国が民間の軍に駆逐艦所有など絶対に認めないと思つたのだ。

「本土からは何の打診もないのですか？廃船とはいえ、まだ立派に動くのでしょうか」

「国防省には、廃船にしたと報告してある。既に解体済だとね」

大佐はこのときリーダーに映る自分たちの船影を、

アメリカ国防省が確認しているのを知る由もなかった。

そのため確認の意味を含めて海軍特殊部隊が今、

ここに向かっているのも想像すらしていなかったのだ。

「それでは、私が上手く話をまとめれば、送り届けてくれるのですね」

「うむ、それは約束しよう。君にはここに残っても、他には役に立ちそうもないしな」

「私の連れも一緒ですね」

「交渉の時は君一人で行ってもらう。交渉がまとまれば、共に送り届けよう。」

仮に奴らと組んで逃げたとしても、駆逐艦の標的になるだけだが、面倒なんでね」

大佐は勝ち誇ったような含み笑いを浮かべた。

それと同時に頬の傷が引つ張られ、独特の凄みを出していた。

初めからステイプは人質として使う予定らしい。山口も同じだろう。

これで山口がこの連中と同胞との疑いはなくなっが、

いまだに山口の素性は明らかにはなっでは居なかった。

とりあえずは今の状態を把握できたが、肝心の病原体については大佐も何も言わなかった。

私はこの状態を生んだ病原体の話しを、ついでを装い切り出した。

「例の病気はどうなってますか？大佐のところでは、情報が入るのではないですか？」

近頃ではテレビもラジオもほとんどのメディアが放送を取りやめ、情報収集は困難になっていたのだ。

「ああ。ある程度なら情報が入ってくる。全てとは言わないが、数力国の情報は傍受している。聞きたいかね？」

「もちろん、どうなっているのか、特に日本がどうなっているのか、知りたいですね」

「では、引き受けてもらえるな？」

私は頷くより仕方がなかった。もしも断れば秘密を知ったと殺されるだろうし、

スティーブ達にも危険は迫るだろう。

「ただし、交渉の件は私からスティーブに話します。良いですね？」

「それは構わんよ。こちらは交渉さえまとまれば良いのだからな。

では、病原体のことを話そう……」

そう言って大佐は部下の一人に合図を送った。

その部下は他のデスクから何枚かのプリントを持って来て、私の目の前に差し出した。

プリントにはそれぞれ国の名前が記されていた。

情報を得た国名だという事は直ぐに理解できた。

その中に『ジャパン』の名を見つけ、私はそれを抜き取り読み始めた。

## 4章（2）

日本は発症が遅かった分、病原体の研究は進んでいた。

そして新たな症状が発見されたと記されてあった。

発信元は『国立免疫科学研究所』と書かれていた。

ここには友人がいたはずだが、今は確認を取る術はない。

新たな症状は、突然の凶暴性と過剰なほどの防衛本能だった。

この両極端とも言える症状は、言い換えれば同等だとも記されていた。

守るために戦うのだ。それは白人に多く見られるが、

発症の遅いアジアではこの症例にも遅れが出ているのではと記されていた。

この報告は現状を見ても、確かに納得できるものが有った。

大佐の言う『この騒ぎに乗じて……』は、紛れもない防衛本能だと思えたのだ。

そして国防省の命令を無視して発起した私設軍隊は、凶暴性とも思えるからだ。

そうなれば行き成り凶暴な本性をあらわすかも知れないのだ。

この症例は同居しつつ、互いに反響し合うとも記されていたからだ。今の太左の態度からは想像すらできないが、顔の傷は紛れもなく新しく付いたものだった。

つい最近、凶暴になった可能性を物語っていた。

それで無ければ、上級将校の顔に傷など付かないだろう。

だからもし実際に私が危険人物だと太左が判断したら、一気に襲い掛かるのは明白だ。

大人しく従順なふりをしなければならぬ。

ここに居る部下も同様な症状があってもおかしくないからだ。

でも、何故そんな症状が出るのか。まるで石器時代の人類そのものに思えた。

石器時代の彼らは家族や仲間を守るためには、突如として凶暴になっただろう。

動物も例外ではない。やはりステープと立てた仮説は正しかったのだろうか。

私を見ても太左の表情は変わらない。どうやら私を危険人物とは思ってはいいようだ。

第一に私は危険人物ではないからだが……。

しかし状況的には圧倒的に不利な状態と言わざるを得ない。

部下の肩には自動小銃がかけられ、

ここからは見えないが、大佐の腰のホルスターにも拳銃は差し込まれているはずだ。

いくら在米期間が長かったとは言え、これだけの武装兵士に囲まれたら気分は良くない。

ここは大佐の申し入れを快く了承するしかなかった。

「では、仲間に伝えてきます。日本に行くためには協力させてもらいます」

「そうか、頼りにしてるぞ。取引相手を脅かせば簡単に済むが、

この先も医薬品はどうしてもほしいのでな」

私が立ち上がり一礼すると、大佐が先ほどの黒人に頷いた。どうやら同行させる気らしい。

現状ではどう足掻いても逃げ出す術などないにも関わらずだ。しかし大佐は平然と語った。

「君が怪我でもしては困るからな」と。

しかも黒人のほかに2人も同行者が現れたのだ。

見た格好は同じような平服だが、動きは兵士そのものだった。

屈強そうな白人の若者二人だ。金髪だが綺麗に刈り上げれていた。

帰りはスティーブと山口が一緒になるはずだ。だから人数を増やしたのかも知れない。

妥当な線だろう。しかし山口が何も言わずに着いてくるかは疑問だった。

山口は目撃者でありそれを感じられて逆に監視されていたのだ。

大佐は山口が誰かとコンタクトを取るのを、予想していたのか、

予め知っていたようにさえ感じられた。

そうになると、山口は何らかの組織の一員とも考えられた。監視が付いていたのがその証拠だ。

しかし今は、三人で乗り越えるしかないようだ。

報告書を読んだお陰で、ホテルへの道で会う人々がみな、凶暴に見えた。

心理とは不思議なものだ。

「やあ、お帰りなさい」

カウボーイの南部訛りがフロントの中から聞こえた。

そう言われれば東部の発音とは、若干違うようにも聞こえた。

東部といっても住んだ事はないが。

拠点は西海岸にあり、仕事の打ち合わせなどで訪れたただけだ。

そこで思ったことは、アメリカは広かった。国内線を使ってもゆうに半日以上かかる。

車での移動など、とてもではないが身体が持ちそうに無かった。

一度ラスベガスまで車で行ったが、わずか隣の州まででも、半日はかかったのだ。

その代わり砂漠に浮かぶネオン輝くオアシスを見た時には、

感激のあまり大きな声を出してしまったほどだ。

永遠とも思える直線道路の先に、そのオアシスは待ち構えていたのだ。

話によれば、カウボーイはユタ州だかアリゾナ州の出身らしいが、

その州ではほとんどが死に絶えたらしい。

やはり環境にも左右されるようだ。二つの州の砂漠地帯はサウジの砂漠とも似ているらしい。

「二人は？」

「部屋に居ますよ」

そう言うカウボーイの南部訛りからは、凶暴性も何も感じなかった。  
例外もあるのだろうか。

## 4章(3)

部屋に戻ると二人の姿は無かった。ホテルの部屋はあちこち探すほどの広さは無い。

2つのベッドと椅子とテーブルがある部屋と、トイレも一緒のバスルームくらいの部屋だ。

「出かけたようですね、そこら辺に座ってください」

私の言葉に同行の3人は無言で頷き、ソファとベッドに腰を下ろした。

こうやって見ると、立派な兵士に見えるものの、凶暴性は微塵も感じられなかった。

若い2人はなにやら笑いながらジョークを飛ばし、黒人は忙しなく足でリズムを取っていた。

どう見ても普通の若者達なのだ。

カウボーイは二人が部屋にいたと言ったが、カウボーイに気づかれず出掛けたのだろうか。

私が二人の身を案じていると、その答えは直ぐに理解できた。

プシュ、プシュっと、数回、音が聞こえたのだ。私の直ぐ後ろの窓の方から……。

その瞬間、若者二人の金髪が真っ赤な血で染まり、

黒人の白い歯の間からも鮮血が溢れ出した。消音銃のようだが、私は動かなかった。

動けなかったと言うほうが正解だろう。部屋に窓から入ってきた男たちは、

私には目もくれずに動かなくなった死体をまさぐっていた。

やがて進入してきた4人のうちの一人が私に声をかけた。

暗視スコープとアサルトライフルの重装備の兵士だ。

「奴らのアジトは知ってますか？」

どうやらこの兵士たちは最初から彼らが目標だったようだ。

どうやら反乱分子の制圧に来た本土の兵士だろう。

日本人の私には目もくれない、いや、もしかしたらカウボーイのお陰かも知れない。

兵士の腕には、U.S. NAVYのワッペンが貼り付けられていたのだ。海軍特殊部隊だ。

「この先のチャモロ・ビレッジ近くの、バンク・オブ・ハワイだ」

「協力を、感謝する」

そう言つて、兵士たちはまたも窓から姿を消したのだ。

部屋に残るのは黒人と2人の白人の死体。

想像したようにカウボーイが知っていれば良いが、もし知らない場合、

この状況はどう思われるだろうか。私が殺人犯と思われる可能性がある。

私は死体に触らぬように部屋を出て、1階のフロントに向かった。

カウボーイは何の表情も浮かべない。無表情で私を見ていた。

「二人は出かけたのかな？部屋に居ないんだが」

私は、カウボーイの反応を見るために、何気ない会話で様子を見た。

「あれ？居ませんか？出かけたのかな？」

どうやら、カウボーイは知らないようだ。だとしたらここには居られない。

犯人扱いは免れないだろう。こんな状況下でも、殺人者は罪には問われる。

それならば良いが、下手をしたら民衆のリンチもありえるのだ。

法律もまともに機能せず、裁判所も機能していないから仕方が無い。

「そう……。ちょっと、探してくるよ」

私は何気なくホテルを出ようとすると、思い出したようにカウボーイが声をかけた。

「部屋は掃除しておくよ」

そして、片目を瞑った。『やっぱり知っていた。頼りになる男だったのだ』

私は声に出さずにお礼を言った。では、二人はどこに居るのだろうか。

時間的には戻ってもいい時間だ。何か情報を掴み動けずに居るのか。それとも何かの理由で戻れないのだろうか。

私は二人の身を案じ、ハーバーに向かい早足で歩き始めた。

挨拶する者も何人かは居るが、その目は異様な輝きを放っているように見えた。

凶暴化が始まったのか。私はその考えを直ぐに否定した。思い過ぎしかも知れないからだ。

いや、思い過ぎで有ってほしかった。

ハーバーの入り口には顔見知りの男がドラム缶の炎を眺めていた。

「こんばんは」

いつもと同じ様な私の挨拶に、男は敏感に反応した。

それまでは放心したように炎を眺めているだけだったのだ。

50も後半だろうが、顔には白髪混じりの髭が長く伸び、顔の半分近くを隠していた。

しかし長い髪の間間からでも分かるほどに、目だけは異様に光っている。

咄嗟に危険を感じたが、男は行き成り立ち上がると私に襲い掛かってきた。

年とは思えないほどの俊敏さだ。

今までの彼は挨拶をしても、ただニコニコと笑うだけの男だったのだが……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5872f/>

---

病原体

2010年10月15日21時49分発行